

---

**諸君！こんなオヤジの主張に耳を貸して貰えませんか？**

たのシイナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

諸君！こんなオヤジの主張に耳を貸して貰えませんか？

### 【Nコード】

N6118P

### 【作者名】

たのシイナ

### 【あらすじ】

我々の時代は企業戦士とまで呼ばれたものさ。家庭内のことまで気にかけて居られるかい！……でも……。

とうとう家のゲーム機が壊れたらしい。

珍しく夕飯に間に合うように団地の我が家に帰宅すると、妻や子  
がなにより先にそう訴えた。悪いことにテレビまで一緒に壊れて映  
らなくなったらしい。

毎日毎晩、テレビに向かって何時間もゲームをやっていたら、遅か  
れ早かれそうなる運命だったのだ。家族全員で使い倒したと言うべ  
きだろう。

妻や子は、この際ちょうどよい機会だから、最新のやつに買い替  
えようと声を揃えたが、一家の主である高橋圭吾は反対した。

「我が家の場合、ゲームやテレビというものが、どれだけ家族同士の  
コミュニケーションを奪っているか、計り知れないものがある」  
と、言う訳である。

圭吾が知る限りでも、就寝前まで母娘でゲーム。ちょっと早めに  
帰ってみても、圭吾が遅い夕飯を食べてる傍で背を向けてゲームに  
没頭してるか、馬鹿番組に笑い転げて呼吸困難になりかけてるかの  
どちらかだ。

「それこそ良い機会だ。食事中はテレビを追放し、我が家に会話を復活させよう!」

と、圭吾は鞆を置きながら、廊下の向こうへ力強く宣言した。

だが、それに同調する妻子の声は聞こえてこず、しらけた嫌な感じの沈黙が返ってくるだけだった。

すぐにテレビなしの最初の夕飯が始まった。

圭吾は自分の席に座ったが、すぐに左隣の若い厚化粧の女に注目した。彼がその女を娘の成実だと認識するまでに数十秒を要した。

「おまえ、幾つになった?」

と、圭吾は娘の横顔を恐るおそる眺めながら訊いた。

「十五……」

「今は、十五歳で化粧をするのか?」

「うん。早い子は小学生の高学年あたりでしてるよ。でも、あたしが始めたのは去年だから……」

圭吾の正面には見た目がなんとも形容しがたい生き物がいる。さつきからその生き物の存在が気にかかってしょうがない。

なぜか正視に耐えぬ　　というか現実には直面するのを怖れて  
その生き物を視界の外に追いやろうとする自分がいた。

もしも、その生き物が圭吾の妻・瑠美子であるとするならば、彼の記憶にある頃の妻よりも、ゆうに二倍は体重が増えている。

「どうも腑に落ちないんだが」  
と、圭吾は発した。

「きみ、いつ頃からそんなふうになりだしたんだ？」

「昼の帯ドラを見始めた頃かしら。食後のデザートっていつか、お菓子を手にして観るのが、これまたいいのよね」

四方八方へと飛び散っているヘアスタイルも気になった。今どき茶色のババージュ（ソバージュとは呼びたくない）頭って。

「じゃ、訊くが。その髪型は？」

「三カ月前かしら。なに、今ごろ。やっぱり気付いてくれていなかったのね」

ふと見ると瑠美子の横に、首から上だけチヨコンと出している幼児の姿。

妻があまりの巨体のために、危うく見逃すところだった。

「その子、どこの子だ？」

近所の子供でも預かっているのだらうと、圭吾は思った。

「どこって、うちの子ですよ！」

壊れたテレビの方を、妻は落ち着かない様子でチラリチラリと眺めながら撫然と言った。

「うちの子お？」

圭吾は仰天。その幼児を見つめた。「その子、いつ産まれたんだっけかな」

と、記憶をたぐり寄せるのだが、はっきりしない。

「おととしの春ですよ！」

「なんで俺、気が付かなかつたんだろう?」  
と、圭吾は暗澹とした気分で言った。  
箸が進まなくなった。

「だって、あなた、仕込んだつきり、あとは仕事、仕事って……」

食卓の風景は、圭吾が期待した一家団欒の図とは、ほど遠かった。まるで赤の他人と夕飯を食べているような、そんな気がしないでもなかった。何やら薄ら寒くもある。

それは家族も同じ思いらしく、全員が黙々と箸を動かすのみだった。

圭吾はつくづくとゲームやテレビ、そして残業が及ぼした悪い結果を嘆いた。

毎日毎晩、それらを繰り返してるうちに、娘は厚化粧の女に、妻はビフォア・アフターのビフォア女へと逆行してしまった。

そして、そのことに気付かなかつたのだ。  
おまけに、その間に男の子が生まれたらしい。

しかも、子供を仕込んだことさえ、圭吾にはまったくの記憶外だった。酔って帰宅したときだろうか。それにしても、これではない。

とにかくテレビ、ゲーム機がなくなったことは、九死に一生を得たようなものだ。

これを機会に家族の絆の再構築を図らねばならない。

だが、情けないことに妻も娘も、元あったテレビの方へと虚ろな眼差しを投げかけては、溜め息をついている。

「ごちそうさま」と、成実が言った。

「まだ半分も食べてないじゃないか」と、圭吾は注意をした。

「だって、つまないんだもの、テレビがないと」

「話題もないしね」

妻までがそう言った。「テレビがなくなった途端、我が家から笑い声と会話が消えてしまったわ」

「あかし、もう、お風呂に入るから」と、恨めしそうな声で娘は言った。

Tシャツを脱ぎ捨て、歩きながらスカートを脱ぎ捨てた。

「しかし、お前たち、それは違うんだ。絶対に間違っている」

と、圭吾はやや焦った。「我が家はテレビとゲームのせい、何か大事なものを見失ってしまったているんだ。とんでもないことなんだ。

そのことに今夜、気がついた……おいつ、こつちを見る、お前たち。お父さんが話してるんだから、お父さんの顔をちゃんと見なさい！」

そのとき突然、玄関のドアが開いた。男が入って来た。

「ただいまあ！」

その声に幼児を除く全員が、その男を凝視して固まった。入って来た男は、目を丸くして訊いた。

「あんた、誰だ！」

問われた圭吾は、今になって状況をつかみかけていた。そして答えた。

「……高橋です」

「高橋？」

「高橋さん？」と“瑠美子”も言った。

「あなた……高橋って、上の階の？」

「上の階のおじさんなの？」

素っ頓狂な声で“成実”が言った。「やーだー」と娘は半裸の体をくねらせ、その場へ座り込んだ。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6118p/>

---

諸君！こんなオヤジの主張に耳を貸して貰えませんか？

2010年12月30日21時50分発行